王家の花

karinomaki

はじめに

この文章では、一つの短編について解説しながら、本当の幸せのありかたについて書いてみたいと思います。

「哲学する王女」

ある王室に、とても聡明な王女がいました。王女は学問が好きで、いつも部屋で本を読み、何か書いていました。
ある日、王様は王女に家庭教師をつけることにしました。その家庭教師は、王女に哲学を教えることにしました。
しかし、困ったことが起きました。王女は哲学を勉強するにつれて、王室を出て、平民になりたいと思うようになっていったのです。王女は、自分が王室を出ていきたい気持ちを、毎日考えていました。言葉で説明するのは難しいのですが、たくさんのものを持っている状態を捨てたくなっているのです。この気持ちを家庭教師の先生ならわかってくれると思い、王女は先生を言いくるめて、味方につけようとしました。

王女は先生に言いました。「先生、パスカルは言いました。『人間は考える葦である』と。人間は弱い葦のような存在ですが、自然に勝る力を持っている。それは考える力です。私は、ただの葦でいたいのです。それには、王室から出ないといけません。自然に勝るためには、何も持たないただの人間でないといけない。この王室も、きれいな服も、いらないのです。」

解説（人間の二つの欲求能力）

自分が向き合うべき人生と、どうしたら本当に向き合えるのでしょうか。これほど難しい問題はないと思います。王女は、一見、本当の意味で人生と向き合いたい素晴らしい人に見えますが、落とし穴があります。
その落とし穴を、カントの哲学から探ってみたいと思います。
カントは、欲求能力を、上級欲求能力と下級欲求能力に分けています。
カントは実践理性批判において、こう書いています。
「自分の幸福という原理は、たとえこの原理のために悟性や理性がどれほど使用されようとも、意志にとっては下級欲求能力に相応する規定根拠しか含まないのである。」
また、このように書いています。
「理性は、それが自分自身だけで（いかなる傾向にも使役されることなく）意志を規定する限り、真の上級欲求能力であり、感性的に規定される下級欲求能力はこれに従属しているのである。」

カントは、どうして欲求能力を二つに分けているのでしょうか。それは、上級欲求能力という、道徳的なものと、下級欲求能力という、ある意味動物的なものが、せめぎあう中で、人間の意志は確立されるからです。つまり、自分が向き合うべき課題は、上級欲求能力という崇高なものだけで解決しきれない・・・王女が求めている、「考える葦」という崇高な生き方は、ある意味で理想論になってしまい、現実味がないのです。かと言って王女の考える理念が間違っているわけでもありません。
どうすれば、理想の生き方ができるのかを、文章の続きで探ってみます。

「人間を木に例える」

王女の言葉を聞いた家庭教師は言いました。「あなたの言うことは、正しい哲学から少しもはずれていません。しかし、あなたが一つ見落としていることがあります。」
「パスカルは言いました。人間は考える葦だと。それは、物事と真剣に向き合う正しい姿勢を言っているのかもしれない。しかし、このことをもっと深く掘り下げるために、私はあなたにカントの哲学を教えてあげましょう。」
そして、家庭教師は、王女を庭の木のところに連れていきました。
「この木をご覧ください。木はどこに生えていますか？」
王女は言いました。
「地面に生えています。」

家庭教師は続けました。「そうですね。ところで、人間の感情には、上級欲求能力と下級欲求能力があると、カントは書いています。上級欲求能力とは、理性という、人間しか持てない、道徳をつくる心です。王女、あなたは間違いなくこれを持っています。だから、清貧に甘んじたいと思ったのでしょう。しかし、カントがどうして、人間の大切な意志を規定するものを上級と下級の二つに分けたと思いますか？」

「木の根元」

家庭教師は、木の根元を指さして言いました。「実はカントは二つを区別することで、二つとも人間の根底にあることを表しているのです。
カントは上級欲求能力と幸福をある意味切り離しています。しかし、カントの意図とは少しずれるかもしれませんが、二つの感情の根本は、幸福という根からなります。この幸福を、自愛と結びつけて否定する気持ちと、道徳的な満足に結んで幸せな徳とすることは、分けられながらも、実はつながっていると考えるべきです。実践理性批判は道徳的な幸福を追求する本でもあるからです。どうしてそう考えるべきかわかるでしょうか。」
王女は黙っていました。さっぱり見当がつきませんでした。
「木は、一つの根を中心に、自分に栄養をもたらすものと、もたらさないものを、自分で分ける力を持っています。しかし、分けることで、美しい花を咲かせる力を持ちます。
カントが実践理性批判で、二つの感情を分けることをしていることは、判断力批判という、芸術と自然美について書いている著書につなげて考えると、とても意義深いことなのです。

二つの感情のせめぎあいが大切なのです。人間しか持てない、道徳を成立させる理性も、ただ幸福になりたいという、感覚的な気持ちも必要。上級欲求能力と下級欲求能力が、カントの言っていることをきわめて延長したとても広い意味において、ともに幸福という根を持ち、その根から成り立つ木が、その二つを美しく分離しているから、花が咲くのです。幸福は、一つの根です。しかし、根を中心に、二つの気持ちを葛藤させているから、美しい花が咲く力ができるのです。その花が、判断力批判という、芸術と自然美の本なのです。」

解説（カントの三つの批判書から考える）

木は「根」という、幸福のもとから成り立つというのが、家庭教師の先生の例えです。
王女は、この話で、「幸福」という根を切ってしまっているのです。自分に与えられた幸福（王室）を切っているのは、王室が窮屈だからというわけではなく、道徳や哲学を貫くためです。しかし、それでは、木の根元を切っていることになります。
もし、王室が腐敗していて、その根を切らないといけないのなら、そうするべきかもしれません。それは、カントが言う、「自愛」による腐敗でしょう。幸福は突きつめすぎると、腐敗してしまうのです。しかし、木は、幸福の根がないと、花を開かないのです。
花として判断力批判が出てきましたが、このことについて考えてみたいと思います。

カントは、純粋理性批判の最初で自然界での認識をまず書き、実践理性批判で道徳について書きました。判断力批判は、この二つの間に位置します。（順番では、三つ目に書かれました。）
純粋理性批判→判断力批判→実践理性批判という構図と考えて下さい。
カントは、実践理性批判の中で、理性によって規定される上級欲求能力と、感性によって規定される下級欲求能力を分けていますが、この二つの間で化学反応が起きているのです。下級欲求能力は、感性よって規定されるのですが、純粋理性批判の認識論のいちばん最初で書かれているのが感性でものを受け止める、思考が成立する前の認識なので、大まかにですが、下級欲求能力は純粋理性批判の方に引き寄せられていると考えて下さい。そうすると、だいたい、下級欲求能力と上級欲求能力の間に判断力批判が位置します。（これは本当に強引な解釈かもしれず、実際には欲求能力は実践理性の概念なのですが、わかりやすく考えるためとお許し下さい。）
では、上級欲求能力と下級欲求能力の間でどのような化学反応が起きているのでしょうか。
人間の中の尊い感情と、動物的な感情の二つのせめぎあいで、何が起きているか。それは、パスカルが考えた、考える葦が存在する場所である、大自然の原理です。花が開くということです。
良いもの（上級欲求能力）と、あまり良くないもの（ここでは下級欲求能力）は、葛藤する、せめぎあうことで、美しいものに昇華するのです。黒い石が砕け散って美しい水しぶきにかわるような現象です。幸福の根がそうさせるのです。幸福の根からなる、人間の二つの側面は、ぶつかりあって、美しいものに砕けるのです。同じものからなる二つのもののぶつかりあいからできる、自然の不思議な現象です。カントは幸福を批判的にとらえ、二つのものの間で切り離そうとしているかのようですが、二つの側面は葛藤することで逆につながっていると私は考えてみました。幸福の根の中の葛藤を人間の大切な営みと考えて。人は、美しいものをぬりかためてその上に立つことも、どろどろの中で苦しむことも両方を選び、二つの中で葛藤することが美しいのです。葛藤の中に、美しさ（判断力批判）があるのだと思うのです。幸せを求め、批判し、苦しみながら確かな道徳を築こうとしたカントの実践理性は、その先の判断力批判の美に向かっていったのでしょう。

幸福の根にはびこる自愛（腐敗）を退け、その正しい意味を探るためには、根を完全に切って

しまってはいけないのです。道徳的なもの（上級欲求能力）とそうでないもの（下級欲求能力）を分けることは、本当に区別して正しい方を選ぶためではなく、両者を戦わせ、美しく化学反応をさせて、花（判断力批判。芸術と自然美。美しいもの）を、開花させるためなのです。
家庭教師は、ここまでを王女に説明し、言いました。「あなたは、本当に王室が不幸せだから出るのではなく、ただ理念を追求するために出たいのではありませんか？それは、強い哲学でしょうか。」

解説（もう少しわかりやすく書いてみます）

何だか混乱してしまう書き方しかできなくてすみません。カントの哲学を自分なりに表現することの難しさを感じています。もう少しわかりやすく書くと、人は、正しいものと、あまり正しくないものを、分けて生きていますが、正しくないものを、完全に切り捨てては、人生の花を咲かせる力がわかなくなってしまうということなのです。二つとも同じ根からなるものなのですから、切り捨てることは本当はできないのです。二つの間で葛藤することが大事なのですね。悩みながら進んでいくことが大事なのです。この王女は、道徳的なものを追求するあまり、全てを切り捨てようとしました。しかし、王女の国の王室は、国民に愛されており、とても幸せな根でした。王女は王室が嫌いだったわけではありません。家庭教師の先生はこう言いたいのです。

「自分の幸せを見つめ、しかし、それを批判する。両方の姿勢が、美しい王家の花を咲かせるのだと思いませんか？」

「王家の花」

家庭教師の先生は、それまで、まだカントの哲学を王女に教えていなかったのですが、この時を境に、カントの批判哲学を教え始めました。王女は言いました。「パスカルは、人間の、考えるという素晴らしさを書くために、逆説的にあえて弱い葦を例えに出したのですよね。しかし、私は弱い葦の、芯の強さをわかっていませんでした。葦が生えている沼は、きっと幸福の沼だったのです。自分の幸せを静かに見つめられる幸福の沼です。カントは幸福を批判しましたが、否定していない。その態度の意味がわかりました。」

家庭教師は、答えました。「沼は、苦しい沼でもありますね。王家にいればほとんど自由がなく、窮屈な思いもあるでしょう。しかし、自分の土台が腐っていないのなら、その場所で咲けるでしょう。あなたは王家の花なのですから。」

人生の花

自分の幸せを見つめる正しい姿勢を持つことを、カントの哲学から読み取ってみました。

自分の課題を解くのがいやになったり、逃げたい気持ちは誰にでもあると思うのですが、逃げ腰になっても、実は課題を解き続けていますし、逆に向き合いすぎても、へとへとになって逃げることにつながってしまったりします。人はとても生きにくいものだと思います。この王女も、王室の中が生きにくかったので、逃げるために哲学を勉強したのかもしれません。しかし、幸福の根があって、正しい向き合い方を模索しつづければ、必ず人生の花が咲くことを知っていれば、きっと上手に切り抜けていける・・・そんなことを読み取っていただければ、とてもうれしく思います。